

# 大石田沢

1986年8月23日  
L

大石田沢林道が沢から離れていく地点から、樹林帯を下って沢に降りる。降りた所は、ナメとなっており、右岸には雄大なスラブがそびえたっていた。7:50身支度を整えて、出発。

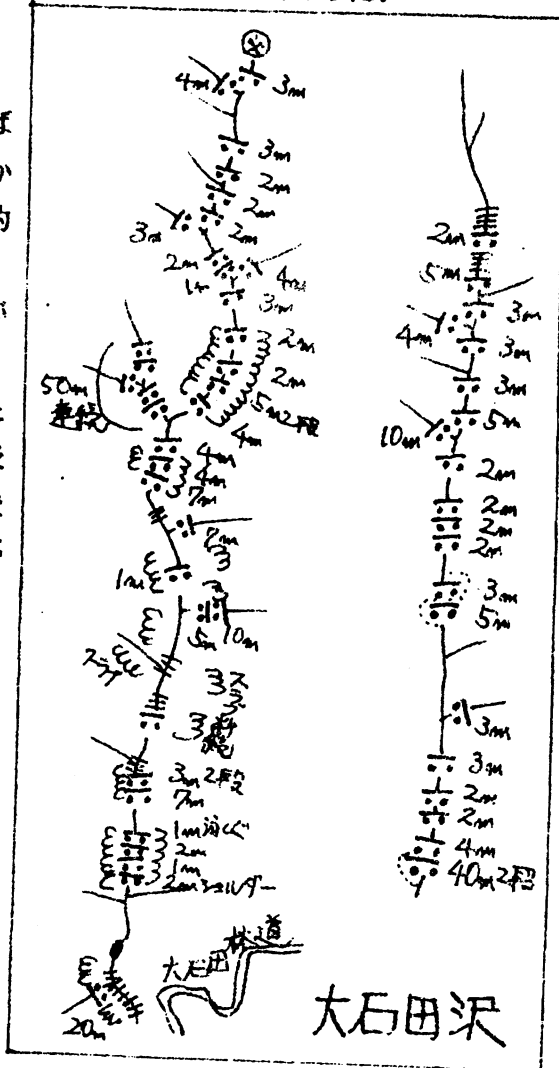
ナメを越え、右岸からカレ沢が合流すると、ゴルジュとなった。このゴルジュ、落差は1~2m程度にすぎないが、大きな釜をもった小滝が4個連なり、通過はなかなか困難。まず最初の小滝は、ショルダーで越し、ザイルを使って、ラストはゴボウぬきにする。この時、まず腰まで水に入る。3つ目の小滝は、思いきって釜を泳ぎきって取り付く。いきなり、大きなパンチをくらった。

さてこのあとはどうだろうかと、期待して遡行を続けたのであるが、その先の7m滝を直登すると、しばらくは平凡な河原歩きとなる。しかし、兩岸には雄大なスラブが断続的に続き、前途に期待を持たせる。

やがて大きな釜を持った7m滝が行く手をふさぐ。大西君は、次の4m滝と合わせて、左岸を高捲きしたが、私と会津労山の橋本君は、滝壺を泳ぎ渡って取り付き、右岸を直登する。ところがである。次の4mがかなり難しい。右岸の不安定な草付きまじりの泥の壁をトラバースし、セカンドはゴボウぬきで越えさす。

次の4mを直登すると、切り立つスラブのなかに5~10mの滝を次々にかけて、右岸から支流が合流し、本流は右に大きく曲がる。支流とは言え、圧倒的な迫力に、しばらくみとれていた。

本流の方は、小滝が次々に現われ



るが、比較的楽に越えてゆける。

やがてこの沢最大の40m二段滝。とても直登できたものではない。右岸から高捲いて、上に出る。

このあと、沢は小滝がほぼ一定間隔をおいて次々にかかるようになる。特にむずかしいものはなく、最初は楽しみながら越していたが、ついには記録どころか登るのさえおっくうになってしまった。

沢の水がなくなったあとひと登りすると、稜線。ここまで4時間30分。大きな滝は1個きりであったが、とにかく小さな滝、ひとつひとつをとれば印象に乏しい平凡な滝が次々にかかる、階段登りに等しい沢であった。(記・  
[タイム] 遡行開始(7:50)→遡行終了(12:20)

### 金丸沢右俣

1986年8月23日

L

廃村になった三条部落に車を置き、5分程歩いて霧来沢に下降する。金丸沢出合は対岸。膝までの渡渉であった。

出合よりすぐF<sub>1</sub> 4m直瀑が現われ、左岸を捲いて越す。このあと悪場というほどのものはなく、河原歩きが続く。ただ、1mの滝手前の小さな釜を藁沼が突破できず、釜に落ちる。

二俣で10分の休憩後右俣に入るが、この後思いもかけぬ悪場が続く。F<sub>2</sub>は直登できず、左岸を捲くが、ヤブが深く20分かかる。小滝を越えるとゴルジュ帯である。中ほどにF<sub>3</sub>がある。左岸を捲くことにし、藁沼を確保して小さく捲く。F<sub>4</sub>はスタンス、ホールドも充分で、楽にクリアする。F<sub>5</sub>は階段状であり、簡単に登る。この後支沢が合流するところで20分休み、行動食をとる。

F<sub>6</sub>斜瀑を越え、左岸に小沢を確認すると、またゴルジュ帯である。F<sub>7</sub>の釜を胸まで入り、突破する。F<sub>8</sub>は一枚岩の右側を登るが、スタンスがかな

